

## 仲秋祭（秋の中頃の祭り）

日付：10 月前半（スポーツの日を含む 3 連休）

仲秋祭は、8 世紀初頭に大和朝廷に討伐された南九州の民族である隼人への追悼の意を表して宇佐神宮が開催する、大規模な 3 日間の祭りです。祭りの始まりとして、神輿に入った八幡神が、大行列によって川岸にある浮殿という宇佐神宮から離れた社に運ばれ、僧侶に迎えられます。最も重要な儀式は 2 日目に行われ、「放生会」（生き物を自由にさせる儀式）と呼ばれる贖罪の儀式で貝類が川に放流されます。最終日、隼人の御霊を鎮めるための祈祷の後、神輿の行列は宇佐神宮に帰り、八幡神は上宮の本殿に移されます。

### 隼人の乱とお祭りの由来

古代の歴史的記録によれば、隼人は 8 世紀初頭に大和朝廷への反乱を起こしました。720 年に九州北部にあった拠点から大和の軍隊が派遣されたとき、八幡神は神力による守護を与えるため神輿に乗って同行しました。これがお祭りで神輿を使用する起源となったと考えられています。この戦いは、残りの隼人の敗北と征服によってすぐに終わりを迎えました。

しかし、その直後に疫病と飢饉が地域を襲い、人々は隼人の復讐心がある原因だと信じた。その後、八幡神から、隼人の乱の際に犯された殺生を贖うために、放生会を毎年行うべきであるという神託が下りました。最初の儀式の準備ができるとすぐ、行列が和間浜へ向かい、貝類が儀式的に水中へ放たれました。これが、日本で初めて神仏習合の施設によって行われた放生会の儀式であると言われています。しかし、償いの儀式を行ったにもかかわらず、地域の悩みは続いたため、隼人の魂を祀り、宥めるために百体神社が立てられました。

宇佐神宮が神道と仏教の融合を実践していた千年ほどの間、この儀式は単に「放生会」と呼ばれていました。19 世紀後半に政府が 2 つの宗教の分離を命じた後、神道の季節の祭になり、仲秋祭と名付けられました。

### 1 日目：迎講

祭りの初日、八幡神は上宮の御殿からお神輿に移されます。神輿の行列は、寄藻川のほとりにある浮殿と呼ばれる小さな社への 8 km の道を旅します。八幡神が浮殿で一時的に祀られる前に、近くの国東半島の六郷満山の僧侶が、神輿の前で、迎講と呼ばれる儀式で経を唱えます。

### 2 日目：蜷放生

仲秋祭の中心となる儀式は、蜷放生（「貝類を自由にさせる儀式」）です。ほとんどの放生会は魚や鳥を使っていますが、宇佐神宮で放つ生き物は蜷や蛤です。伝説によると、人々は 8 世紀に疫病

が蔓延したことは貝に原因があると考えたため、隼人の鎮まらない霊がその形で生まれ変わったと信じていたと言われています。

儀式の準備として、貝類は代々その務めを果たしてきた蜷木家の人々によって集められ、葦の束に包まれます。この束は、この目的のために指定された神社で清められ、浮殿に運ばれ、神職が祝詞を唱えます。そして神職は船で川の中ほどへ行き、もう一つの儀式の後、蜷と蛤が水の中へ放たれます。水位が低い場合、神職はその川岸に立って儀式を行います。

### **3日目：御霊鎮魂**

最終日、八幡神を運ぶ神輿は宇佐神宮へ戻されます。その途中、行列は一旦、百体神社で止まり、神職が隼人の霊を鎮める(御霊鎮魂)ために黙祷を捧げます。その後、提灯を持った氏子を伴った神輿の行列は上宮に帰ります。八幡神は御殿に移され、仲秋祭が幕を閉じます。